

く、山香町立石にあるが、この墓塔は享保二十年の建立であるから、おそらく遠見郡志にいう「予細あって焉に終る。」の伝承によつて建てられたものであらう。

最後に豊前の緒方氏について述べておこう。私の長男の嫁は福岡県豊前市横武所河原田の生れで、生家は緒方氏である。聞くところによると同郡志には緒方氏が七軒あり、いずれも家紋は「三ッ鱗」を用いているという。豊前市に隣接する築上郡新吉富村には緒方の地名があり、この付近は昔の緒方荘である。「兩豊記」によると、室町時代の初期から同末期戦国時代にかけて、築上郡、下毛郡地域には、加未・大神・臼杵など、緒方一族の諸氏が活動している。

(追記)

福岡市内およびその付近にある「おがた」姓は、たいてい緒方氏のほか、緒形・尾形・尾方・小形・小方・小巢・尾湯・尾片の各氏になっている。私の集計では緒方が最も多く六〇三を数え、ついで尾形が六九、小方が四九、尾方が一四、小形一二となり、緒形、小巢、尾湯、尾片は少なく、二ないし一となっている。

このうち緒方氏の多いのは福岡市と早良町(三月一日に福岡市と合併する)、それから大宰府町、大野城市、筑紫野市、春日市、志免町、古賀町などで、福岡市の南部と東部各市所に集まっている。

また福岡市付近には佐伯氏も大神氏が比較的多いが佐伯氏は古くからの住吉神社の社家、大神氏は古くからの菅崎宮の社家の姓である。従つて筑前地方の佐伯氏はおおむね大伴佐伯連から出た佐伯宿禰の裔といわれ、豊後の大神は佐伯氏とは別系かようである。

(筆者住所) 福岡市東区城浜園地八一二
佐藤医院内(郵便番号八二二)

調査

馬鎮神社の競馬会

— 思い出の青山の馬とばせ —

会員 深 友 勘 藏

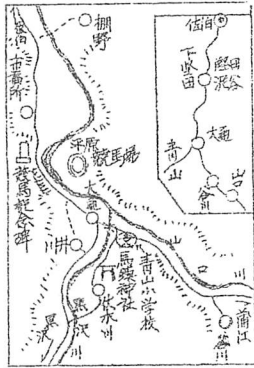
競馬記念碑

本郡青山村鎮座馬鎮神社ハ古来伝ヘテ牛馬ノ神ト林シ毎年二回之ヲ祭典ヲ奉行シテ其神靈ヲ敬祀シ又陰曆正月十九日競馬会ヲ催シテ之ヲ記念シ一ハ以テ神徳ヲ銘シ一ハ以テ牛馬ノ改良ヲ奨励シ未リシガ客年更ニ地ヲ宇平原ニ相シ郡内十六箇町村ノ賛助ヲ得テ競馬場トナシ今歲第ニ次例会ニ際シテ記念碑ノ建設ヲ企テ深矢近蔵山口庄次郎岡田五郎三氏率テ其事ヲ掌リ碑成リ撰文ヲ余ニ囑セラレ依テ如上ノ由來ヲ叙シ以テ懇窮ニ點サシムト云耳

大正四年一月 佐伯中学校長 秦 政治郎撰
同 校長 員 重田 亨書
馬鎮神社 氏 子 建
天野 磯吉 彫刻

これは、青山地区(佐伯市青山)の中腰にある平原に、今は荒れ果てた競馬場を見守るかのよう、堅田川を隔て右岸道沿いに建っている、記念碑の碑文である。

馬鎮神社は、競馬場から約一キロ程上流、伏木川といふ部落にある。保食神を祭神として、「元和元年一月十



七日黒沢村汐月嘉古工門十ノ一建立 明治六祭百年村社ニ列セラル」と神社明細帳に記されている神社で、古来牛馬の神として、近郷近在の尊崇を集めた社である。例祭は正月・六月・十一月に行なわれるが、正月十九日は古くから競馬が催されて、大変な賑わいを呈していた。この競馬は何時頃始められたのか、その起原はつまびらかでないが、古老の語るところによれば、「流鏑馬」ともいわれて来たというから、初めは神事として行なわれた流鏑馬が、競馬に変わって来たのではあるまいか。その場所、はじめは西野お塔の芝原で行なわれていたが、大正三年に氏子を中心になつて、郡内十六ヶ所村の賛助を受けて、川井の川向う平原に丸馬場を造成し、以後毎年この平原で行なうようになり、「馬とばせ」と呼ばれて、青山地区で年中行事の初めを飾る催しとして親しまれて来た。

「十廿日正月」を過ぎると、競馬会にそなえて馬場の設営がはじまる。まず市福新・川井の青年連中によつて平原に渡る仮橋が掛けられる。その位置は、旧藩時代から明治二十四年に現在の依伯—三軒屋—蒲江線が開通するまでは、市内への主要路線の跡である。(昔の道路は市福新から平原にわたり、又川を越して川井へと通っていた)道がつけば馬場の草けずり、地ならし、清掃をし、丸太を使って馬繋ぎ場を組まあげる。

馬場の外には、煮売屋の釜場ができ、幕かこいの青空客席が出現する。これは伏木川の馬鑲神社の下にも設けられ、ともに関係部落の有志が店を出していた。いよいよ当日になると、

馬鑲神社には朝早くから、家畜の安全祈願のため、村内はもろろん、郡内各所村から参拝者が、三々五々列をなして続く。そして神前に額づき、お札と牛馬の絵の木版刷りの護符をうける。それは家に持ち帰り、厩舎の入口に張りつけて家畜の守りとした。

当時はまだ自転車など少なく、参拝人は殆んど徒歩で男の服装は股引に船頭からげ、羽織・絆纏又は厚羽織を着、頭は中折帽子・烏打帽子か、手拭で頬がむりをしていた。女はよそ行きの装いで、三里、五里を遠くとせず、何人かつ連れだつて杖を引いたものである。

馬鑲神社の参拝を終えた人々は、平原の競馬場へ足を向ける。そこではすでに煮売りの準備ができ、うどんを煮る釜の湯気、ゴマ出しのかわり、酒め小豆せんざいの匂いが、寒空にたまたまって食欲をそそっている。人々はむしる換敷に坐りこんで、思い思いに腹ごしらえをしながら、競馬の始まるのを待つのである。

競走馬は、村内・郡内所村をはじめ、遠く北は中津、北九州、南は延岡・宮崎方面からも集まった。遠来の馬は調教されていたが、近在からのそれは、農耕馬や馬車馬の中から、選られたものが参加していた。

やがて役員席から、開始合図の振鈴がひびき渡ると、見物人はいっせいに馬場の土手にかけ上がる。

競馬は抽せんで組合せ、四五頭一組で、一周約二六〇分の丸馬場で行った。スタートとゴールは役員席の前で、振鈴でいっせいに疾走に移る。調教された競走馬は別として、そうでない馬は珍奇なレースを展開した。騎手も車門ではないので、コースを外れて大回りするもの、土手にかけ上ろうと試みる馬、中には騎手の手綱さばきに従わず、逆コースで走る馬もある。その度に見物人は喚声をあげたり、あるいは竹竿をぶり回して追い度すなど、

場内場外一体になつて、昂奮とどよめきの中に驟敗がき
まり、驕馬は賞品が渡される。それは厚紙包みの反物
などで、一般有志の寄贈であつた。

次の組合せを待つ間は、観衆は馬場外の芝原に散る。

そこでは様々な見世物や露店が店開きしている。明治か
ら大正初期生まれの人なら、一度はのぞいたはずの「の
ぞきからくり」が、新しい事件や小説の筋を描いた絵を
のぞかせながら、細い竹藪で指子をととり、独得の節回し
で説明を教いあげるものである。その哀調を帯びた「のぞ
き節」は、今も酒席で年輩の人の口から聞くこともある。
その隣では「ヘントコ回し」が、どら声を張り上げ、そ
の先では哀れな不具者が甚きうて見せる見世物小屋や、
大道将棋・駄菓子・おもちゃ屋などが立並び、喧嘩の
うづがまいてゐる。煮売り屋の中では、酒の回つた連中
が喧嘩をはじめ、それを制止に入つた者同士で口論にな
るやら、突り振やかであつた。

一方馬場の方でも、組合せやスタート位置で口論にな
り、はては馬喰同志がつかみ合ひを演ずるなど、レース
の中断することがしばしばあつた。堅田の馬喰に喧嘩好
きがあつて、その人達の争いが無いと「馬とばせ」の気
分が出ないほどの名物であつた。

こうした中で何組か予選をくり返し、決勝が行なわれ
る。草競馬といつても、残つた優秀な馬同志の出走で
見ごたえがあつた。優勝馬には、馬鎧神社の御幣・表徴
などが贈られる。そうして短かい冬の月が傾くとともに、
平原に立ちこめた昂奮と歓楽の一日が終るのである。

夜は近くに旅芝居の一座がかつた。これは竹角の吉
良平吉老が、請元で興行することが多かつた。村人は娯
楽の少ない頃だつたので、寒さもいたわらず芝居見物に集
まつたものである。大いに二晩か三晩つつけて興行した。

「馬とばせ」の行事が終ると、男衆は副業であつた炭
焼きのため山に入り、女子衆は一年中の燃料である薪と
りに精出す毎日が初まるのである。

村人最大の楽しみであり、地をあげての年中行事で
あつた「馬とばせ」も、時代の流れの中で消え去つた。

思えば、平原に競馬場が建設された大正三年は、国際
的には第一次世界大戦がぼつ発して、日本はドイツに宣
戦を布告している。また国内では桜島の大噴火があり、
地味では八月の台風によつて、黒沢東光庵の格の大木が
吹き倒された年である。

發足以来、競馬は時代とともに盛衰をくり返しなが
ら、第二次大戦まで続いたが、戦況がはげしくなるにつれ、
人々の心は伝統を守る余裕を失い、競馬場は軍用保護馬
訓練場になり、「馬とばせ」も自然消滅の形となつた。

あつたかも知れない。年々倒れた黒沢の老桜樹のように、
戦後行なわれな農地改革は、建設以来三十年の歴史を
もつて、人々の哀散を共にしたこの競馬場を強制買収し
て、緑地帯に分割売渡し、名実ともに「馬とばせ」のこ
とを消滅させたのである。

しかし、建設記念に植えたという塩竈桜(黒沢東光庵の
日残った。今なお樹勢旺盛で、毎年早春に万葉の花を翻
いて、「ここに競馬場ありき」と、往時を語りかけるよ
うに、道ゆく人々の眼を惹きませている。

なお最近喜ばしいことは、この由縁の地の外に、若い
人たちが結成している野球チーム「青山キングス」の手
で、昨冬りつばな野球場が造成されたことである。かつ
て日は村人たちのレクリエーションの場であつた競馬場
平原が、今後は球場平原として、地味スポーツの中心と
なるよう、その成長を見守りたいものである。(了)